

「生き甲斐・やり甲斐」

エッセイスト 風間佳

私の友人で、60才で退職と同時に起業した人間がいる。
彼に言わせれば、まだまだ働かなければならない理由があるという。
娘さんが離婚して小さい孫を連れて戻って来たのだそうだ。
娘もかわいいが、孫はまた何倍もかわいいと言う。
その孫のために働くのだそうだ。「おじいちゃんは頑張る！」というわけだ。
そのために、定年のない社長業を始めたというわけだ。

資金的には退職金と郵便局の満期、それに保険会社に掛けていた年金が貰えて、
住宅ローンも定年に合わせておいたからちょうど終わるのだそうだ。

そう話す彼の顔は生き生きとしている。輝いてさえいるのだ。
やる仕事があるからだろうか。
同年代が皆ゴールを迎える中、新たな目標に向かってスタートしたからだろうか。
同年代が皆「お疲れさま」と言われる中、「頼りにしてる」と言われるからだろうか。
同年代が皆「もう自分達の出る幕ではない、若い者の時代だ」と思う中、
「まだまだ自分の時代。若い者とも渡り合うんだ」という気合いがあるからだろうか。
・・・彼を羨ましいと思うのは、私だけではない気がする。

そういえば、以前こんな話をしてくれた友人もいた。
彼は、60才で1,000万円の満期を迎える生命保険に入っているそうだ。
60才定年までに自分が死ねば、その1,000万円は家族に。
60才定年まで生きていれば、その1,000万円は自分の独立資金にするというのだ。
釣りが趣味で、定年後に釣り道具屋を始めるのだそうだ。
自分が試してみて良かった道具を置き、仲間やお客と情報交換をしながら、
毎日を好きな釣りの話に囲まれて生活するのだそうだ。

彼の話してくれた計画はこうだ。
店の運転資金には、退職金や年金は一切使わず、銀行からも無借金で通す。
もし資金の1,000万円が底をついたら、その時はいさぎよく店をたたむ。
店は1,000万円分のロマンなのだそうだ。
1,000万円で、夢と、生き甲斐と、やり甲斐と、仲間との出会いを買うのだそうだ。

そういえば、この友人も生き生きと輝いていたなあ。
私も真剣に準備し始めた方が良いかもしれない。

E1B-0013-lifeplan